

フォークナーとコールドウェル

— 私刑の諸相 —

花岡 秀

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) は同世代の作家について尋ねられるたびに、他の数人の作家とともにアースキン・コールドウェル (Ers-
kine Caldwell) の名前を挙げているが⁽¹⁾、ミシシッピとジョージアという違い
があるにせよ、二人がともに南部出身であることは読者にさまざまな興味を抱
かせる。南部は、綿花栽培と黒人奴隷制によって経済、社会、文化の大部分が
支配されていた旧南部時代から、南北戦争とその敗北、屈辱に満ちた再建時
代、遅々として進まぬ近代化といったアメリカの中でも特異な歴史を辿った地
域である。このような歴史を背景に据えるとき、さまざまな問題を抱え、苦悩
し続けてきた南部を見詰めるこの二人の作家の世界を照らし合わせてみるこ
とは、南部を多角的、客観的に捉えるうえであながち無意味なことではあるま
い。

「南部の厄介な歴史の核心」⁽²⁾を形成してきたものの一つに黒人奴隷制に端を
発する黒人問題が挙げられるが、とりわけ黒人に対して行なわれてきた私刑
は、その問題の深さ、複雑さ、悲劇性を象徴するものである。歪んだ南部の縮
図の断片でもある私刑は、悩み、傷つき、喘ぎ続けてきた南部の現実の諸相
を不気味に映し出す。フォークナーもコールドウェルも、何篇かの作品の中
で私刑を扱っているが、私刑を描く視点、黒人の捉え方は両作家の間で微妙な
ずれを示し、南部の諸相が屈折して浮かび上がることになる。フォークナーの
「乾いた九月」 (“Dry September”) とコールドウェルの「昇る太陽に跪け」
 (“Kneel to the Rising Sun”) の二篇の短篇もこの微妙なずれを示しながら、
南部の現実を異なった角度から映し出すことになる。

I

「乾いた九月」は、『これら13篇』(*These 13*)を経て最終的に『ウィリアム・フォークナー短篇集』(*Collected Stories of William Faulkner*)に収録されることになるが、1931年に「スクリブナー」誌に発表された。一方、短篇集『昇る太陽に跪け』(*Kneel to the Rising Sun*)のタイトル・ストーリーとなっている「昇る太陽に跪け」は、1935年に同じく「スクリブナー」誌に発表された。両作品ともに厳密に物語の時代背景を特定することはできないが、ほぼ同じ時代を背景としている。「乾いた九月」では、私刑の主導者であるマックレンドン(McLendon)が第一次世界大戦に参加していることや、ミニー・クーパー(Minnie Cooper)が12年も前に密通を犯していると噂された相手の銀行の支配人がジェファソンの町で初めて自動車を持った男であることから、時代背景はほぼ1920年代前後と考えると差つかえない。「昇る太陽に跪け」も、プア・ホワイトであるロニー(Lonnie)⁽³⁾や黒人のクレム・ヘンリー(Clem Henry)が明らかにシェアクロッパー制のもとで苦しい生活に喘いでいること、また物語中でガソリン・スタンドの描写があり、自動車を通っていることなどから、その時代背景も同じく1920年代前後とみてよいように思われる。アメリカにおける全体的な私刑の件数は20世紀に入って著しく減少したが、一時的にはあれ、第一次大戦直後とりわけ南部において増加した⁽⁴⁾。両作品の時代背景はこの時期と重ね合わせる事が可能に設定されているのである。

両作品を比較して、まず気付くことは、私刑に掛けられる黒人と、私刑を主導する白人の描き方の相異である。「乾いた九月」では、ミニーが自ら捏造し、ながした噂によって殺される無実の黒人ウィル・メイズ(Will Mayes)が、固有名詞で表現される場合に対して「黒人」または「黒ん坊」という普通名詞で描写される場合が圧倒的に多い。一方、「昇る太陽に跪け」で私刑によって殺される黒人クレムは、終始名前のクレムで表わされている。

「乾いた九月」の第一章では、マックレンドンがホークショウ(Hawkshaw)

の理髪店に居合わせた男たちを扇動してウィルの私刑へと駆り立て、一団となって店を出るまでの様子が、彼らの会話を通して描写されるが、わずか4頁余りのなかに‘white’が12回、‘negro’に類する言葉が10回も用いられている。ウィルの拘束から私刑へと至る場面を描いた第三章では、ウィルは大部分が‘the Negro’としか表現されていない。物語の冒頭から「白人」と「黒人」のコントラストが色濃く影を落とし、一個の人間であるウィルは普通名詞の「黒人」としてしか捉えられない憎悪の対象でしかない。ただ一人、真相の解明を主張し、ウィルを弁護しようとする理髪師のホークショウに対して、「お前たちはそんなところに坐って、みすみす黒人の野郎にジェファソンの町の往来で白人の女を強姦させようというのか」⁽⁵⁾、「起こったかだと？本当に起こったかどうかなどどうでもいいことだ。黒人の野郎どもをほっておいて、本当に事件が起こるまで待つつもりか」(CS, 172)と吐き捨て、一団は私刑に出かけるのである。

私刑を扇動する、第一次大戦の勇士マックレンドンにしても、理髪師の一人が、「マックレンドンを怒らせるぐらいなら、俺だったら、ホークなんかよりもまだウィルになるほうがありました」(CS, 173)と語るように、ジェファソンの町での彼の立場が強調されるだけで、彼の心理を窺わせるような描写はほとんど見られない。最終章で私刑を済ませ家に戻ったマックレンドンが描かれるが、それとて「鳥籠のように新しくて小さい、小綺麗な白と緑のペンキを塗られた」(CS, 182)家に住む、町の住人としての彼の姿を窺わせる描写となっている。

「昇る太陽に跪け」に登場する黒人クレムの描かれ方は、ウィルとは対照的である。クレムは、常に明確な意思表示をし、強欲なプランター、アーチ・ガナード(Arch Gunnard)のもとで一家を抱えて喰うや喰わずの生活に苦しむロニーに対して、「なぜ、配給の食糧をまるまるくれねえのなら、なにもいらねえとアーチに言ってやらねんだ」、「もしまるまる貰えねえとわかれば、こんなところを出て、小作させてくれるもっといい旦那を見つけることだってできるんだぜ」⁽⁶⁾と平然と言っている。「黒人であっても、食べ物が必要なときは躊躇せ

ずに配給の食糧をくれと言える」(K, 206) 人間, 常に固有名詞で呼ばれ, 相手
が誰であろうと明確に意思表示ができる人間として描かれている。

呼び集めた仲間とともに, クレムを私刑に掛け射殺してしまう地主のアーチ
に関して, マックレンドンとは異なり, かなりな性格描写が与えられてい
る。ロニーが飼っている猟犬のナンシーの尻尾をジャックナイフで切り取る
という彼の残忍な行為からも明らかであるが, 「一度自分が何かをしたいと思
えば, 何者にも絶対に邪魔をさせない」(K, 210) 男として描かれている。アーチ
に対しては, 私刑を引き起こすような人間としての十分な性格付けがされてい
ると言えよう。

さらに, 両作品において重要な役割を担うミニー, ホークショウ, そしてロ
ニーについて考えてみたい。ウィルの私刑を引き起こす直接的なきっかけをつ
くったのがミニーである。彼女は, 黒人に「襲われ, 辱められ, 恐怖に陥れら
れた」(CS, 169) という根も葉もない噂を自ら捏造し, ながしたのである。実
際には何一つウィルと係わりのない彼女の経歴が「乾いた九月」の第二章でつ
まびらかにされるが, それはジェファソンの町における彼女の立場の変化の軌
跡でもある。彼女は, 高校時代は「一種の激しい快活さ」(CS, 174) とでも呼
べるもので町の社交界の中心的な存在だったが, 同年輩の友人たちに取り残さ
れたと知った頃から「激しく現実を拒否するような当惑」(CS, 174) の表情を
浮かべ始めた。26, 7歳頃に40歳ぐらいの銀行の男やもめの支配人との不義密
通を噂され, 現在に至っているのである。彼女と同年輩の友人の子供たちに
「おぼちゃん」とではなく「おねえちゃん」(CS, 174) と呼ばせ始めるが, 町
の男たちが彼女が通りかかっても「もはや彼女の姿を眼で追うことさえしな
くなった」(CS, 175) 現実を前にして, 一度ならず二度目も町の人々の注目を集
める噂を自らながしたのである。ウィルの私刑を誘発する直接的な原因とな
ったミニーについて読者に与えられる情報は, 何よりも彼女の町の中での立場
の変遷である。

ただ一人ウィルを庇おうとするホークショウについても, 読者に伝わって
くるものは何よりも町の中での彼の立場の心許なさであろう。ウィルを弁護しよ

うとする彼は、「お前はとんでもねえ白人だ」(CS, 170), 「お前なんか生まれ故郷の北部へでも帰ったほうがいいぜ。ここ南部じゃあお前のような奴はいらねえんだ」(CS, 171) とたたみかけられる。ホークショウにしても、「私はウィル・メイズをよく知っていますよ。彼はよい黒ん坊ですよ」(CS, 169) と繰り返すだけで、結局ウィルを救うことはできない。「よい黒ん坊」としか弁護できない彼の背後に見え隠れするものはやはり町の中での彼の白人としての立場であろう。

こうした登場人物の描かれ方、私刑の捉え方は、「乾いた九月」が三人称の客観的視点で描かれていることと深く関わっていることは当然である。個々の登場人物たちは、ジェファソンの町すなわち共同体との係わりで捉えられ、彼らの行動の意味もまず共同体における意味が提示されている。ウィルの私刑の経緯にしても、そこに係わる一人一人の内面、心理が探られるのではなく、むしろ人種という越えられることのない壁を境に共同体内に働く不気味な力に焦点が当てられ、その力の本質が明らかにされていくのである。

「昇る太陽に跪け」で、クレムの私刑を捉えるうえできわめて重要な役割を果たすのがロニーである。それは、この物語ではロニーの心理の動揺、その振幅の激しい変化によって私刑の恐怖と悲劇性が読者に伝えられるためである。ロニーは、アーチに対して常に対等にものを言ってきたクレムを見て、「黒人がどうして自分よりも勇敢になれるのかわからなかった」(K, 209) し、「できることなら何としても自分がクレムと入れ替わって彼のような立場に立ちたい、と思うような時が何度もあった」(K, 208)。ロニーは、空腹のあまり食べ物を求めて夜中に家を抜け出した父親を捜すのをクレムに頼むが、その依頼がクレムが私刑に掛けられるきっかけとなる。誤ってアーチが飼っている獐猛な食用豚の檻に落ち、豚に喰い殺されたロニーの父親を発見したクレムは、「まるで自分も白人であるかのように」(K, 230) アーチに向かって糾弾を始める。しかし、クレムは結局近くの森へ逃れ、身を潜めることになるが、問題はクレムに対するロニーの態度である。

今回ばかりはただならぬアーチの様子を察知したクレムは、ロニーに向かっ

て、「お前さん何とか力になってくれねえか」(K, 234)と再三頼み、森へ隠れる。ロニーがクレムから頼まれたことは、ただ彼が沼地の方へ逃げ出したとアーチに答えるだけのことだった。ロニーには、たとえクレムが父親を捜すために手を貸してくれたとしても、自分が白人で「おおっぴらに黒人に味方することなどできない」(K, 233)ことはわかっていたし、アーチに楯つくことなど思っただけでも縮み上がるほど恐ろしいことだった。父親の死も配給食糧すら満足に与えようとしないアーチに端を発するものでありながら、ロニーはその最低限の生活を守るために、クレムを裏切り、彼の隠れ場所をアーチに告げてしまう。「白人の女を暴行したこともなければ、白人の男を射ったこともない」(K, 237)のに、クレムは松の木のとっぺんにしがみついたまま、「昇る太陽の陽射し」(K, 243)の中で射ち殺されることになるのである。

クレムを裏切りながら、アーチが呼び集めた私刑団とともに、私刑の一部始終を目撃するロニーの心理描写は迫真のものとして読者に伝わるものである。自分の意識とは無関係に一団の先頭を進んでいく「脚の力」(K, 243)、クレムを裏切ったことへの苦渋、私刑団の男たちと森へと進みながら、ロニーは死んでしまった父親を依然として捜索している錯覚に陥ったりもする。間断なく続く容赦のない発砲、クレムの身体が地面へ落ちるときのすさまじい音、ロニーの心臓の一瞬の停止、続く錯乱状態、鼻をつくような、たちこめる硝煙、ロニーの視覚、聴覚、さらに嗅覚までを通して、私刑の場面の臨場感が圧倒的な迫力をもって読者に迫る。

「乾いた九月」が客観的な視点から語られているのに対して、個々の登場人物の内面、心理に深く入り込むのに適した三人称の全知の視点から「昇る太陽に跪け」が進められているが、この視点の相異がそのまま両作品の私刑の描き方の本質的な差異に深く係わっていると言えよう。ともに私刑を扱ながらも、「乾いた九月」が見えざる人種の壁という埋め尽くし難い溝によって分け隔てられた、いわば共同体との係わりから捉えようとするのに対して、「昇る太陽に跪け」では私刑に係わる個々の人間の内面に入り込み、それぞれの心理の激しい揺れを通して私刑の現実を捉えようとするのである。

II

「乾いた九月」と「昇る太陽に跪け」における私刑の捉え方の差異とともに、両作品に描かれた私刑の原因にも興味深い対照が見られる。

「乾いた九月」でウィルが私刑に掛けられる直接的な原因となったのは、ミニーの捏造による噂話である。たとえ噂話であろうとも、黒人による白人女性への暴行は決して許されることのない行為である。男たちが「もはや彼女の姿を眼で追うことさえしなくなった」状態は、彼女のアイデンティティを脅かし不安に陥れる現実でもある。「激しく現実を拒否」しながらも、彼女がアイデンティティを確認し、性的なフラストレーションを昇華させる方法は、男たちの視線を集め、共同体の人々の話題にのぼることしか残されていなかったのではなからうか。ミニーがもはや、「まさに南部そのものとの同一視」⁽⁷⁾を期待できるような南部の淑女ではなく、無実の黒人を死へと追いやる根も葉もない噂を自ら流すような狂気の女性であっても、その捏造された噂は南部が抱え込んできた歪んだ現実の側面を象徴する、あの「レイプ・コンプレックス」⁽⁸⁾を想起させるものである。自らの家系にたとえ一滴でも黒人の血が混じることに対する南部白人の脅迫観念にも似た恐怖心、黒人男性に対する白人男性のさまざま差別、蔑視、さらには歪んだ劣等感などを投影した「レイプ・コンプレックス」は、南部の歴史そのものでもある。

ウィルの私刑を描く場面⁽⁹⁾で頻繁に描写される「埃」も、歴史そのものを想起させるものである。路地裏の入り口、往来、広場、ジェファソンの町を中心とした一帯、いたる所をこの「埃」は包み込んでいる。しかも、私刑を済ませて町に戻ってきたマックレンドン一行が乗った自動車が巻き上げる「埃」が、たちまち何事もなかったかのように「永遠の埃」(CS, 180)に呑み込まれてしまう。時間の経過とともにあたり一帯に堆積した埃、南部の呪われた暴力的な過去をも包み込んで堆積し続けてきた「埃」は、現在の私刑が舞いあげる「埃」はもちろんのこと、未来永劫、南部を覆い続けていくことさえ暗示する

ものであろう。少なくとも、ウィルの私刑が歪み呪われた暴力的な過去を色濃く反映するものであることは否定し難い。

一方、「昇る太陽に跪け」で描かれるクレムの私刑の背後に窺えるものは、ウィルの場合とは様相を異にする。直接的には黒人クレム自身の白人アーチに対する応対の姿勢である。クレムは帽子もとらずに、「旦那はよくご存じのはずだ、なんでロニーの親父が丸々太った豚どもに喰われてしまったか、…親父さんは腹がへってたまらずに夜中に寝床を抜け出したんだ、…旦那のところで働いている他の連中と同じように足りもしない配給食糧で親父さんはやってきたんだ」(K, 231-32)と、ロニーの父親の死の責任をアーチに向かって責め立てたのである。しかし、それは、常日頃からクレムの黒人らしからぬ生意気な態度を苦々しく思っていたアーチに、またとない「待ち望んでいた機会」(K, 209)を与えることになったのである。

長年にわたって⁽¹⁰⁾クレムがアーチに接してきた姿勢、「まるで自分も白人であるかのような」態度、帽子もとらずに要求すべきことは要求し、一歩も後に引かない強情さ、そういったクレムの態度が、アーチの意識にクレムに対する憎悪を植えつけてきたことは明らかである。かなり個人的な確執が黒人クレムと白人のアーチの間に存在し続けていたわけである。背後に南部における白人による黒人への人種差別があることは言うまでもないが、何一つ思い当たることもなく突然私刑に掛けられ殺されるウィルの場合と比較すれば、クレムの場合にはかなり個人的な人間関係における摩擦が私刑の要因になっていると言えよう。しかし、この物語における人間関係を抜き差しならぬものとしているさらに大きな要因をこういった人間関係の背後に認めざるを得ない。

プア・ホワイトであるロニーも黒人のクレムも、地主のアーチから配給食糧を支給されて小作しているシェアロッパーである。ロニーは、「少しでも自分が怒りや憤慨の様子を示そうものなら、アーチがその日の日没までに自分を農場から追い出してしまう」(K, 210)ことがわかっていたので、わずかな配給食糧に甘んじ、アーチに自分の猟犬がジャックナイフで尻尾を切り取られるのもじっと我慢して耐えたのである。飢えのために夜中に食べ物を捜しに出た、

耳の不自由な父親が誤ってアーチの所の豚小屋に落ち、彼が飼育する豚に食べられてしまってもロニーは何一つ言えず、逆にクレムに抗議するようにけしかけられる始末だった。物語の冒頭から最後にいてるまで随所で描写されるロニーの瘦せて「尖った顎」(K, 206)は、シェアクロッパーたちの貧しく悲惨な生活を象徴するものであろう。たとえそのような苦しい立場であっても、シェアクロッパーたちにとっては他に選択の余地のない生活であり、彼らに残された道はただその生活を守ることしかなかったのであろう。クレムを裏切ることになったのもこの悲惨な生活の窮状が大いに保わっていたと言えよう。

一方、「小作人にろくに配給食糧もわたさねえような人間は、あんたの親父がきちんと埋められるまで見守っているのが当然だ」(K, 227)と言いつち、「まるで自分も白人であるかのような」態度で「足りもしない配給食糧」のことをアーチに問い詰めるクレムの背後にも、農園主が小作人を劣悪な条件で働かせ、ひとり利を占めるシェアクロッピング制度に対する憤懣が読み取れる。クレムのアーチに対する反抗は、何よりも彼らが置かれた悲惨な生活状態に根ざすものである。地主のアーチに対するロニーの屈辱的な服従やクレムの反抗、ロニーの父親の悲惨な死、ロニーのクレムに対する裏切り、さらにクレムの私刑、こういった経緯の背後にシェアクロッピング制度、つまり南部農業の遅れた仕組みの存在が見え隠れするのである。

シェアクロッピング制度は、南北戦争後に資本不足に悩む南部に出現した一種の小作制度である。地主は自分の農場を区分し、プア・ホワイトや黒人に貸し付け、小作地を借り受けたシェアクロッパーは造った作物を地主と分けるのである。しかし、このような制度の下では、何一つ持たない小作人は耕作道具や生活必需品までを高金利で地主から前借りし、結局は借金に縛られた半農奴的な農民に陥ってしまったのである。しかも、借金に縛られた小作人は現金作物の綿花の栽培を強要され、さまざまな矛盾を南部にもたらすことになった綿花の単一栽培を南部に再びもたらすことになったのである⁽¹¹⁾。「昇る太陽に跪け」で描かれる黒人クレムの私刑に深い影を落とすものは、黒人に対する差別はもちろんのことであるが、「乾いた九月」の場合と異なり、いわば南部の再建

を遅滞として進まぬものにした原因の一つであるシェアクロッパー制⁽¹²⁾，すなわちその経済機構である。

ほぼ同時代の南部を舞台とした黒人の私刑を描きながらも、「乾いた九月」と「昇る太陽に跪け」ではかなり扱い方が異なっている。「乾いた九月」では、無実の黒人の私刑の背後に、消し去ることのできぬ過去の影が怪しく揺曳する共同体を浮かび上がらせている。共同体が、歴史的な力のメカニズムとでも呼べるものに不気味に操られ、私刑へと一気に突き進んでゆく恐怖が鮮やかに映し出される。そのメカニズムは、黒人であろうと白人であろうと個人の意識や心情などは押し潰し、たちまち狂気の世界へと人々を駆り立てる恐るべきものである。黒人奴隷制度に基礎を置く綿花王国とその絢爛たる文化、南北戦争とその敗北による文化の崩壊、北部主導による屈辱的な再建といった、激しい「浮き沈み」(CS, 181)を辿った南部の歴史の歪んだ一局面が、一黒人の私刑を通して浮かび上がる。しかも、この物語が、個人の心理に入り込むことのない、きわめて冷徹な客観的視点から語られていることは、その得体の知れぬメカニズムがたちまちのうちに一人の黒人を理由もなく抹殺してしまう経緯に一層の不気味さとリアリティを与える結果となっている。

「昇る太陽に跪け」では、対照的に、私刑に係わる個々の人間の内面やその人間関係に焦点が絞られ、事態の推移につれて一刻一刻変化していくそれぞれの心理の動きが執拗に追い続けられることになる。たとえ相手が白人の地主であっても自らの意思を明確に表わし、要求すべきことは要求し、不正に対しては告発する毅然とした姿勢を貫こうとしたがゆえに私刑に掛けられる黒人。直接的には飢えが原因で父親を亡くすほどの貧しく悲惨な境遇にありながらも、その生活を維持するために同じ境遇にある黒人を裏切るプア・ホワイト。しかも、彼が依頼した援助がもつてその黒人は私刑に掛けられる。圧倒的に有利な立場を背景に、小作人たちを圧迫し、些細なことを口実に日頃から不快感を抱いていた黒人を射殺する地主。全知の視点が焦点を定め、とりわけ深く入り込むプア・ホワイトの地主に対する卑屈な感情、黒人に対する屈折した感情、自

らの裏切りによる動揺と錯乱の描写は迫真のものである。

食欲な地主とその下で苛酷な条件で労働を強いられるブア・ホワイトと黒人の関係を軸に、それぞれの心理の揺れを通して、一人の黒人の私刑が描き出されるが、この哀れなブア・ホワイトから判断力、自らの意思で行動する気力を奪い、「白人の女を暴行したこともなければ、白人の男を射ったこともない」黒人の私刑を引き起こす現実が、いわば経済的な仕組みから捉えられているのである⁽¹³⁾。

一人の黒人の私刑を描きながら、フォークナーは、払拭し難い南部の過去、黒人に幾多の犠牲を求め、過ちを犯してきた血塗られた過去を、南部の歴史的背景を浮かび上がらせている。それに対して、コールドウェルは、同じく黒人の私刑を取り上げながらその私刑に深い影を落とすものとして、人間の生活を大きく左右する経済機構を色濃く描き出している。時が流れ、時代が変化しようとも、一人一人の人間の個性や心情などが入り込む余地のない、突如として噴出する歴史的な不気味な力、また、物質的な生活環境はもちろんのこと、個人の心理、心情にまで残酷な影響力を及ぼす経済機構、二人の南部作家が描き出す黒人の私刑の背後に映し出される現実の対照は、どちらも南部の現実のまぎれもない一局面である。黒人に対する私刑という悲劇的な暴力が、単なる人種主義という一語で集約されるようなものではなく、そこには過去から現在に至る南部のさまざまな現実の錯綜が認められるのである。

注

- (1) Frederick L. Gwynn and Joseph Blotner (eds.), *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1977), p.143. ヴァージニア大学における学生との質疑応答では、この箇所以外にもフォークナーの同じ発言が見られる (p.206, p.281)。その他さまざまな場所でのインタビューでの同様の言及については、James Meriwether and Michael Millgate, *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1980) を参照。
- (2) Eric J. Sundquist, *Faulkner: The House Divided* (Baltimore: Johns Hopkins

University Press, 1983), p. ix.

- (3) ロニーが白人であるのか黒人であるのかは微妙であるが、ただ一箇所ではあるが、“He was a white man. . .” (K, 233) と描写されている。Arthur Ruhl などはこの箇所を読み落として、ロニーを黒人として捉えている。Arthur Ruhl, “Seventeen Tales by Erskine Caldwell,” *Critical Essays on Erskine Caldwell*, ed. Scott MacDonald (G. K. Hall & Co., 1981), p. 34.
- (4) Wilbur J. Cash, *The Mind of the South* (New York: Random House, 1974), pp. 299-300. Cash は具体的な数字を挙げて説明している。
- (5) William Faulkner, *Collected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1950), p. 171. 以下この版からの引用箇所については本文中に CS の記号とともに頁数を示す。
- (6) Erskine Caldwell, *Kneel to the Rising Sun* (New York: The Viking Press, 1935), pp. 222-223. 以下この版からの引用箇所については本文中に K の記号とともに頁数を示す。
- (7) Cash, *op.*, *cit.*, p. 116.
- (8) *Ibid.*, pp. 114-117.
- (9) ウィルの殺害場面は直接描写されていないが、マックレンドン一行が処刑を済ませてきたことは、帰りの自動車に乗っている人間の数から読者には容易にわかる。
- (10) クレムはこの土地に15年留まっていることが作品の中で言及されている。
- (11) 清水博(編)『アメリカ史』(山川出版, 1969), 186頁。
- (12) Alfred Kazin, *On Native Grounds: An Interpretation of Modern American Prose Literature* (New York: Reynal & Hitchcock, 1942), p. 371.
- (13) James Korges, *Erskine Caldwell* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969), p. 29. Korges をはじめ、多くの批評家がコールドウェルの経済的側面への関心を指摘している。